大学生初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー
－日中対照研究の立場からの一考察－

王　　一　迪[1]・奥　村　圭　子[2]

要　旨

初対面の場面での会話は、人間関係を形成する一歩として重要な役割を持っている。初対面会話の中で、何を話すか、どのような話題を取り上げるかによって、その後の談話展開が決定されよう。アジアからの留学生が増える中、日中母語話者の接触機会は確実に増えているが、ぞれぞれの母語の習慣に影響され話題選択が行われているならば、互いに違和感を覚えたり、摩擦を生む可能性もあろう。本稿では、日本語母語話者同士、中国語母語話者同士の会話における話題選択の傾向と会話の展開の仕方について分析を行った。その結果、いずれのグループも同様の初対面会話話題選択スキーマを有している一方で、前者の方は相手のネガティブ・フェイスに配慮し距離を置きながら会話を進めたり、互いの接点を見つけたりしつつ話題展開を行うのに対し、後者の方は相手のポジティブ・フェイスをより重んじ、プライベート領域の話題の開示で心的距離を縮めようとすることが明らかとなった。分析を通して相互の異同を知ることが、日中接触場面の円滑なコミュニケーション教育へ繋がることと期待される。

キーワード：初対面会話、日中対照、話題選択スキーマ、話題選択ストラテジー

１．はじめに

近年、グローバル化に伴い、日中民間交流や経済交流がますます頻繁に行われており、同時に日本語を学び日本文化に接し、日本へ留学したり、日本で就職したり、経済活動に従事するために訪れる中国人が増加している。しかし、日本文化に触れ、日本語を身に付けていると言っても、日本文化や社会的習慣を理解し、適切に行動することができるとは限らない。それは日本人が中国人と接触する場合も同様であろう。そこで、日中の異文化間コミュニケーションの中で、起こりうる誤解や摩擦、誤った偏見を回避するため、そしてよりよい対人関係構築のためには、日中言語コミュニケーションの特徴の相違点を究明する必要があるのではないだろうか。

とりわけ初対面会話は相手の第一印象に大きな影響を与えるため、人間関係形成においても重要な役割を果たすと思われる。Berg & Clark[1] は、初対面の場面を“early decision making and differentiation（初期段階の意思決定と分化）”と呼び、それが対人関係の親密化の可能性を決定する重要な段階としている。中国での日本語教育においては、初めて会う人と話すとき、できるだけ相手に敬意を示しながら会話を進行していくべきであると教えられるが、話題選択においても、いきなり「年齢」や「宗教」などを話題にしないほうがいいと言われている。しかし、具体的にどのような話題が積極的に会話に取り込まれるべきかの研究については今まで管見の限り、見当たらない。

本研究では、会話実験とフォローアップ・アンケート調査を行い、初対面会話における話題選択スキーマとストラテジーを考察し、日中それぞれの母語話者同士による初対面会話において、

①何が話題として選択されるか

②話題選択において、どのようなストラテジーが使用されるか

の２点をリサーチ・クエスチョンとして明らかにしていく。そして、それらの結果を踏まえ、日中の大学生初対面会話における話題選択と話題選択スキーマと選択のストラテジーに関する類似点と相違点について検討を試みる。

２．先行研究

２．１　初対面会話研究

初対面会話というのは、言うまでもなく、人間関係構築の第一歩として、より円滑なコミュニケーションに重要な役割を果たすものだと言えよう。Svenneving[2] は、人と人の関係性を重視し、人々は会話することによって、「社会的な自己」「認知的な自己」「感情面の自己」の３種類の基本的な自己イメージを相手に示すとした。また、不確実性減少理論（Uncertainly Reduction Theory）で、見知らぬ人（Stranger）との初対面会話におけるコミュニケーションの特徴を不確実性の減少という側面に焦点を当てて論じている。さらに、西田[3] は、「初期交流において、人は不安や不確実性を感じる」という前提から、「コミュニケーションをすることにより、不確実性を減少させることができ、不確実性が減少したところから、人間関係が生まれるのである」（p. 3）と述べている。すなわち、初対面会話の動機として、見知らぬ人に対す

[1] 西南交通大学日本語学部所属、2016 年 10 月より 2017 年 8 月まで山梨大学国際交流センターに交換留学生として在籍
[2] 山梨大学国際交流センター所属

る配慮や思いやりなどを考慮に入れながら、不確実性あるいは不安感の減少に人は努めるのである。しかし、異文化間コミュニケーションにおいては、どのような話題を取り上げるのが配慮や思いやりとなるか、また相手に好印象を与えるかなどの判断が困難となり、どのように話題を選択すべきか、どこまで自分を開示するか、また相手の個人的なプライバシーに踏み込むべきかなどがわからないまま、障害が起こり得ると思われる。

2．2　話題選択スキーマとストラテジー

「話題」は談話レベルにおける概念である。テーマ、トピック、話題という用語及び概念は研究者（Brown & Yule[4]；Coulthard[5]； メイナード[6] など）によって異なるが、三牧[7] は「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を持つ事柄の集合体を認定し、その集合体に共通した概念」を「話題」としている。本研究では三牧[7] の定義を「話題」とする。

話題選択に関わる先行研究は、アンケート調査に基づいた研究（全[8]； 西田[9]； 熊谷･石井[10] など）と会話データに基づいた研究（三牧[7]； 奥山[11]；張[12]；趙[13] など）に大きく分類することができる。

全[8] は、初対面場面における話題回避調査を行い、日本人と韓国人のプライバシーに関わる話題と意識などに注目し、初対面会話の配慮の仕方、そして、プライバシーに関連する話題とその取り上げ方について、日韓の意識の相違を指摘した。それは、初対面会話では、どのような話題を回避したほうが良いかという話題選択ストラテジーの考察に必要な情報を提供している。

西田[9] は、アンケートによりアメリカ人学生と日本人学生を対象に話題の出される順番と情報開示量を調査した。その結果、初対面会話においてアメリカ人学生の選択した話題は個人的とされるものが多く、日本人学生はプライバシーに関する話題を選択しない傾向があることを示している。しかし、アンケート調査では、抽象的な形の情報しか得られず、ある話題がどのように選択され、発展していくかの詳細をつかむことはできない。話題選択スキーマとストラテジーを考察するためにはアンケート調査は不十分だと言えよう。

熊谷・石井[10] は、会話において話題の好みについて、日本人と韓国人を対象にし、アンケート調査及び面接調査を行った。その結果、「趣味」「スポーツ・テレビ番組」「余暇の過ごし方」といった話題は日韓で共通して好まれたのに対して、身長や体重などの身体に関係すること、収入、宗教・信仰は相手のプライバシーを侵す好まれない話題とされた。また、日韓の大学生を対象とした面接調査から、「話を盛り上げ、展開させていけること」「相手の私的な部分に立ち入りすぎないこと」が重要であることを指摘した。

一方、三牧[7] は、日本人大学生同性２名１組計 38 組の初対面会話の話題内容を分析し、総話題数 265 の 95％が 23 話題項目、そして「大学生活」「所属」「居住」「共通点」「出身」「専門」「進路」「受験」の８つの大きなカテゴリーに入り、文化を共有する集団には一般的あるいは典型的な知識の集合である「初対面会話における話題選択スキーマ」が共有されると述べている。さらに、話題選択ストラテジーとして、(1) 直前の発話を取り立てる、(2) 基本情報交換期で得られた情報の中から選択する、(3) 初対面話題選択肢リストの中から選択する、(4) 共通点を探索し強調する、(5) 相違点に関心を示す、(6) 危険な話題を回避する、の６種類を提示した。本研究では、これらのストラテジーを参考にポライトネス理論も考慮に入れ、考察を行いたい。

2．3　ポライトネス理論

ポライトネス（politeness）とは、一言でいうと、「人間関係を円滑にするための言語ストラテジー」（宇佐美[14]）と定義され、フェイスを脅かす行為を表に出さない社会的言語行動と捉えられており、日本語で言う「丁寧さ」とも、英語の一般的意味での“politeness”とも同義ではない。ポライトネスの概念として、Brown & Levinson[15] は、「ポジティブ・フェイス（positive face)」と「ネガティブ・フェイス（negative face)」という二種類のフェイスがあるとする。ポジティブ・フェイスとは、個人から承認された望ましい自己像を維持したいという「プラス方向への欲求」であり、ネガティブ・フェイスは、個人の領域を維持し行動の自由を保ちたいという「マイナス方向に関わる欲求」として捉えられる。すなわち、他者に「近づきたい欲求」が、ポジティブ･フェイスであり、他者と「距離を置きたい欲求、侵入されたくない欲求」が、ネガティブ・フェイスと言える。

また、三牧[7] は、初対面会話場面をポライトネスの観点から捉え、コミュニケーションをより円滑に進めるために「心的距離を接近させると同時に、疎である相手に対する配慮から一定の距離を保持する」という矛盾する要請が明瞭な場面であると解釈している。

3．研究方法

本研究では、調査協力者である日本語母語話者同士（以下 JJ とする）４組と中国語母語話者同士（以下 CC とする）４組の母国語による 30 分間の初対面会話のデータを収集し、文字化した。協力者は全員 20 代前半の大学生である。調査協力者の内訳は次のとおりである。

表３－１　協力者の内訳

調査協力者	調査場所	人数
日本語母語話者２名 JJ	山梨大学（日本）	４組（男男１・男女２・女女１）
中国語母語話者２名 CC	調査者の自宅（中国山東省）	４組（男男１・男女２・女女１）

データの収集方法として、自然会話データを収集するために、非言語コミュニケーションも捉えるビデオ録画・録音を採用し、初対面の母語話者同士二人をペアにし、JJ グループ４ペア、CC グループ４ペアの会話を録画した。また、調査協力者への倫理的配慮から、録画の際には、調査協力者に事前に説明、承諾の場合に署名をしてもらった（資料を参照）。初対面の母語話者をそれぞれ、実験室へ調査者が誘導した。なお、調査の目的は事前に説明せず、録画開始直前に「30 分間自由に話してください」という指示を出し、調査者はその場を離れた。初対面自由会話を録画・録音し、30 分終了時に調査者が入室して終了を告げた。調査終了後、フォローアップ・アンケートで積極的に話した話題と避けた話題、答えやすかった話題、答えにくかった話題について記入してもらった。また、本研究で収集する調査協力者の名前や所属等の個人情報については、全て A、B 等のアルファベットで表すことにした。

全ての会話データを文字化し、話題リストを作成、話題選択スキーマとストラテジーを分析した。JJ グループの文字化データについては、日本語母語話者２名に確認作業を依頼した。これらの JJ グループ４組、CC グループ４組の会話データを分析対象とした。

４．話題選択スキーマの日中比較

趙[13] を参考に話題選択率を算出した。JJ グループ４組と CC グループ４組の会話データ、合計８組の会話を文字化し、話題カテゴリーと話題項目を分類した結果、次の表４－１のようになった。

初対面会話データを文字化した上で、大話題として取り上げた項目を集計した。その結果、JJ の初対面会話では、約 30 分間の会話内容で合計 83 の話題があり、１組あたりの平均話題数は 20.75 であった。さらに、各組で現れた同じ話題を同一話題項目としてまとめると、合計 43 の話題項目がある。CC の初対面会話では、合計 62 の話題があり、1 組あたりの平均話題数は 15.75 であった。また、合計 32 の話題項目がある。

さらに、「サークル・部活」、「授業」、「バイト」、「レポート」、「休暇」、「遊び」などの話題を「大学生活」という大きなカテゴリーに分類する。他の話題項目についてもこのようにカテゴリーに分類し、一つの話題カテゴリーに属した各話題項目の総出現回数と４組の総話題数 83 から、話題カテゴリーの選択率を計算した。

このように、JJ の 43 の話題項目をカテゴリーに分類すると、「大学生活」、「所属」、「居住地」、「出身」、「共通点」、「将来」、「大学選択・受験」、「社会」、「趣味」、「その他」の 10 話題カテゴリーとなった。調査協力者の数が限られているにもかかわらず、JJ の初対面会話の話題はこの 10 話題カテゴリーに集中しており、それは JJ の初対面会話話題選択スキーマと考えられるのではないだろうか。

一方、CC の 32 の話題項目をカテゴリー化してみると、「大学生活」、「所属」、「居住地」、「出身」、「共通点」、「将来」、「大学選択・受験」、「社会」、「趣味」、「その他」の 10 話題カテゴリーとなり、それは CC の初対面会話話題選択スキーマと言えよう。表４－１で示す通り、CC と JJ の初対面会話選択スキーマの話題カテゴリーは同一であった。言い換えれば、CC と JJ は同じ初対面会話話題選択スキーマを有しており、初対面会話において、上記の 10 話題カテゴリーから話題を選択する傾向が強いということが窺える。

初対面の接触場面においては、一般的には会話をする相手のフェイスを互いに維持するために努力する。ポジティブ・フェイスを満足させるために、相手に認められたい、仲間と見なされたいという意識を満足させたり、話し手が相手に対する親密な行動を取ったりする傾向が

表４－１　初対面会話における話題選択の比較

話題カテゴリー				CC								JJ			
	選択率	話題項目	C1	C2	C3	C4	合計	選択率	話題項目	J1	J2	J3	J4	合計
大学生活	0.2097	サークル・部活					0	0.1928	サークル・部活	1	1	1	1	4
		授業	1				1		授業		1		1	2
		バイト					0		バイト	1		1	1	3
		レポート　宿題		1			1		レポート　宿題				1	1
		休暇				1	1		休暇			1	1	2
		遊び			1	1	2		遊び				1	1
		キャンパス	1	1		1	3		キャンパス				1	1
		タイムスケジュール	1				1		タイムスケジュール					0
		寮	1		1	1	3		寮					0
		英語		1			1		英語	1	1			2
	合計		4	3	2	4	13	合計		3	3	3	7	16
所属	0.0806	学部　学科	1	1	1	1	4	0.0964	学部　学科	1	1	1	1	4
		学年		1			1		学年	1	1	1	1	4
	合計		1	2	1	1	5	合計		2	2	2	2	8
居住	0.0806	居住地		1	1	1	3	0.0241	居住地				1	1
		通学		1	1		2		通学			1		1
	合計		0	2	2	1	5	合計		0	0	1	1	2
共通点	0.0323	共通の知人	1				1	0.0843	共通の知人	1	1		1	3
		共通の経験	1				1		共通の経験	1	1	1	1	4
	合計		2	0	0	0	2	合計		2	2	1	2	7
出身	0.0968	出身地					0	0.0723	出身地	1	1	1	1	4
		出身校	1	1	2	2	6		出身校		2			2
	合計		1	1	2	2	6	合計		1	3	1	1	6
将来	0.0645	就職		1	1		2	0.0241	就職		1		1	2
		進学		1	1		2		進学					0
	合計		0	2	2	0	4	合計		0	1	0	1	2
大学選択・受験	0.0323	入学試験		1			1	0.0361	入学試験	1	1			2
		試験		1			1		試験				1	1
	合計		0	2	0	0	2	合計		1	1	0	1	3
社会	0.1129	気候　環境	1		1		2	0.0602	気候　環境			1		1
		物価					0		物価			1		1
		同性愛		1			1		同性愛					0
		留学生			1		1		留学生		1	1		2
		大学の男女比率		1	1	1	3		大学の男女比率		1			1
	合計		1	2	3	1	7	合計		0	2	3	0	5
趣味	0.0323	麻雀　ゲーム				1	1	0.1807	麻雀　ゲーム					0
		アニメ					0		アニメ	1				1
		映画					0		映画	1	1			2
		スポーツ					0		スポーツ	1		1		2
		旅行					0		旅行	1	1	1	1	4
		買い物			1		1		買い物			1		1
		洋画					0		洋画	1				1
		音楽					0		音楽	1	1			2
		外国語					0		外国語	1	1			2
	合計		0	0	1	1	2	合計		7	4	3	1	15
その他	0.2581	家族		1			1	0.2289	家族		1			1
		名前	1	1	1	1	4		名前	1	1	1	1	4
		恋人		1			1		恋人					0
		結婚					0		結婚		1			1
		あいさつ	1		1	1	3		あいさつ	1	1	1		3
		筆者との関係	1	1	1	1	4		筆者との関係		1		1	2
		車の免許					0		車の免許			1	1	2
		性格		1			1		性格		1			1
		好き嫌い							好き嫌い	1			1	2
		留学					0		留学		1		1	2
		交通		1	1		2		交通			1		1
	合計		3	6	4	3	16	合計		3	7	4	5	19
合計							62							83

あると思われる。しかしながら、相手の私的領域に踏み込みすぎると逆に相手のネガティブ・フェイスを脅かす行為になる。したがって、初対面会話では、選択のリストのレベルに応じて、話題を「無難な話題」、「話してもいい話題」、「危険な話題」に分類すると、初対面の会話における話題選択スキーマは「無難な話題」と「話してもいい話題」から成ると考えられる。

日中間異文化コミュニケーションにおいて、初対面の会話で「何が話題として選択されるか」という問題を考えるには、まず相手の文化でどのような話題が「無難な話題」と「話してもいい話題」とされるのか、つまり初対面における話題選択スキーマを知ることがよりよいコミュニケーションを円滑に進めるために重要だと思われる。CC と JJ の場合は、表４－１の 10 話題カテゴリーから話題を選択すれば無難であろうことを示している。

また、CC と JJ ともに選択率が高い話題カテゴリーは、「大学生活」「出身」「所属」に集中している。さらに、話題項目において、「学部・学科」「名前」「あいさつ」などは CC、JJ ともに高い選択率を示した。このような話題は、日中異文化コミュニケーションにおいて、取り上げやすい話題になるのではないかと考えられる。

一方、話題カテゴリーに関しては、CC と JJ の間に話題項目選択の相違点が見られた。CC 側の「居住」についての話題選択率は８％に達しているのに対して、JJ 側は 2.41％しか見られなかった。また、CC と JJ の初対面会話で共通して多く見られた話題カテゴリーとして、「所属」が挙げられるが、JJ の場合は 9.64％で、CC 側の 8.06％よりやや高かった。他の話題カテゴリーについて、CC 側は「将来」「社会」の選択頻度が高く、JJ 側は「共通点」「趣味」などの選択頻度が高かった。各話題カテゴリーの選択率をグラフ化すると、図４－１と図４－２のようになる。

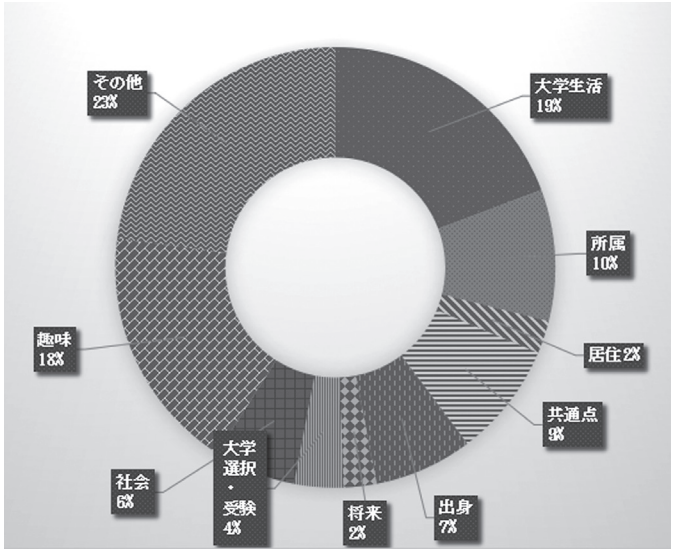


図４－１　ＪＪの各話題カテゴリーの選択率

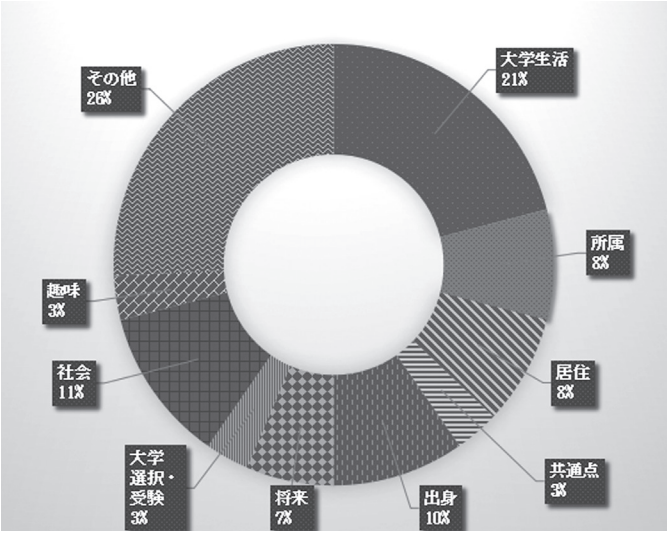


図４－２　ＣＣの各話題カテゴリーの選択率

図４－１と図４－２に示す通り、各話題カテゴリーのうち、「大学生活」の選択率が JJ（19％）と CC（21％）ともに高いが、JJ は「大学生活」以外のカテゴリーの選択率において差が大きい。それに対して、CC は他のカテゴリーの選択率においては、それほど大きな差が見られず、JJ より良いバランスが取られている。

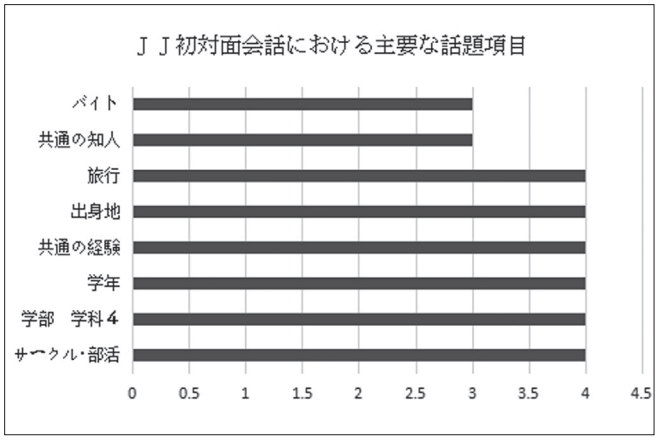
また、CC は「居住」についての選択率が８％に達しているが、JJ は 2.41％のみに留まっている。「所属」については JJ（9.64％）も CC（8.06％）も高い選択率を示した。CC は「将来」（７％）「社会」（11％）の選択率が高く、一方 JJ は「共通点」（９％）「趣味」（18％）の選択率が高い。

次の図４－３は、JJ と CC の８組のうち、３組以上に選択された話題項目を示している。話題数については、JJ は 83 であるのに対して、CC は 62 であった。図４－３で示すように、JJ と CC の共通した話題項目として、「学部・学科」「名前」と「あいさつ」が挙げられる。

さらに、話題項目によって、JJ と CC の間に相違点も見られた。JJ の会話において、「サークル・部活」「バイト」「学年」「共通の知人」「共通の経験」「旅行」などの話題項目を選択する頻度が高いが、CC の会話においてはそれほど高くない。一方、CC の選択頻度が高い項目は「出身校」「寮」「キャンパス」「居住地」「大学の男女比率」などであった。

「大学生活」における「ネットの使用」「寮の引越し」など、寮生活に密接な関係がある話題は CC に見られたが、JJ には見られなかった。一方、「大学生活」における「留学」「国際交流」「実習」などの項目は CC には見られなかった。また、話題選択の頻度において、JJ は「サークル・部活」の選択の頻度が圧倒的に高いのに対して、CC には見られなかった。これは、調査を行った中国の大学では、学生はほぼ全員寮に住んでおり、寮生活が中国人の学生生活で大きな比重を占め、学生の間での関心事になる傾向にあることに依るのであろう。

その一方で、調査を行った日本の大学には、留学促進や国際交流の組織があり、留学や国際交流の経験を持っている学生が多い。また、サークルや部活は日本の大学文化を構成する重要な要素で、日本人の学生にとっては不可欠な活動である。したがって、これらのテーマについて中国人の学生より強い関心を持っていると考えられる。JJ と CC の文化背景が異なるため、関心を持つ分野に相違点があり、話題選択にも異なる傾向が見られたと言えよう。



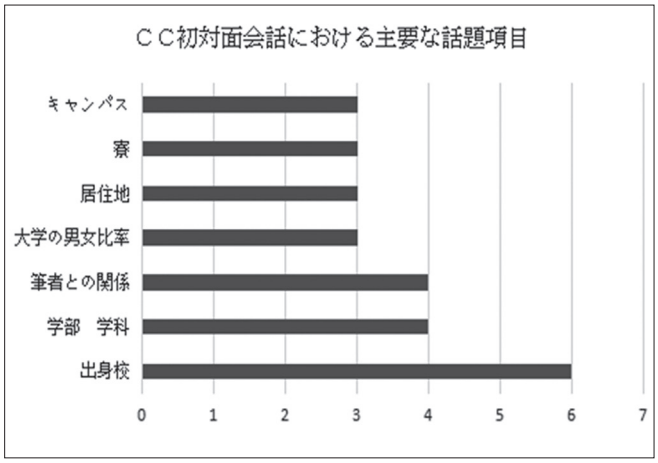


図４－３　ＪＪとＣＣの主要な話題項目

５．話題選択ストラテジーの日中比較

５．１　選択源から見る話題選択ストラテジー

三牧[7] に倣い、話題の選択源と内容を基準に話題選択のストラテジーを考察し選択し、話題選択源からみると、本研究の調査協力者である CC と JJ はともに「直前の発話を取り立てて話題化する（S1)」、「基本情報交換期で得られた情報の中から選択し話題化する（S2)」、「基本情報交換期で得られていない情報について、初対面話題選択リストの中から選択する（S3)」という三つのストラテジーを用いていることが明らかとなった。

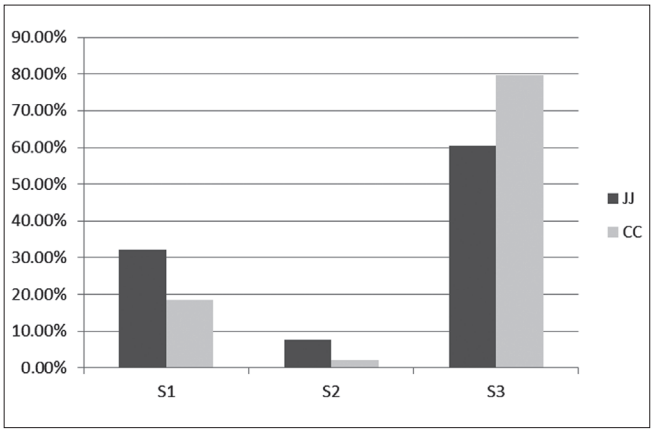


図５－１　話題の選択源から見る話題選択ストラテジーの日中比較

図５－１に示す通り、初対面の会話において、JJ の S1、S2、S3 の使用比率はそれぞれ 32.08％、7.55％、60.38％であった。一方、CC の初対面会話では、S1、S2、S3 を用いて取り上げられた話題の比率はそれぞれ 18.37％、2.04％、79.59％であった。

選択源から見る JJ と CC の話題選択ストラテジーにおける類似点と相違点を見てみたい。まず、話題選択ストラテジーの利用率の順位から見ると、JJ と CC とも S3、S1、S2 という同じ順となっているが、その三つのストラテジーの間に大きな差が見られた。CC の S3 の使用比率が JJ より大幅に上回っているのに対して、JJ の S1 と S2 の使用比率が CC よりはるかに高かった。

S1 というストラテジーは、会話を円滑に進めるために、直前の会話に関連する新たな話題を探すストラテジーである。以下、JJ の会話の中で現れた S1 の例を挙げて具体的に述べてみる。

例１　A:　転勤族です。
　　B:　いいですね、いろんなとこに行けて。
　　A:　まあまあ、そう、そうですね、いいですね。
　　B:　デメリットの方は大きい感じですか。

A は繰り返しの発話となっている。これらは「限られた反応」(minimal response)（McLaughlin & Cody[16]）であり、進行中の話題ではそれ以上展開しないことを示唆している。新規話題を導入する必要が生じたと感じた B は、その後「転勤のデメリット」について発問し、転勤族という発話を取り立てて話題化することによって、「居住地」へと話題の転換を果たした。

会話のつながりを重視する S1 と異なり、S2 及び S3 は、話題を転換するために、あるいは沈黙を回避するためによく用いられるので、共通した話題が多いと考えられる。

S2 は、既に提供された話者相互に関する情報の中のいずれかを選択して話題化するストラテジーである。以下、JJ の会話の中で現れた S2 の例を挙げて具体的に述べてみる。

例２　A:　本当、全然分からない。親孝行って言われるし。
B:　えっ。でも、教育だと就職はあれですか、小中高みたいな。
A:　いや、教員って決めてる子もいますけど、私は教員にはならないかなって感じ。

この例は、基本情報交換期に現れており、それまでに学部、学科が自己紹介の形式で情報提供されていた。これを「自己紹介」といった大話題１とするが、Bは、それを話題化させて、それまでの「自立」「親孝行」の話題項目からこの新話題「就職」へと誘導している。

S3は、三牧[7]が指摘するように、主に質問形式で相手に尋ねることによって話題化し、相手に情報を求める。日中の母語話者同士による初対面会話の「話題選択において、どのようなストラテジーが使用されるか」という本研究のリサーチ・クエスチョンへの答えとして、S3を用いて選択された話題に絞れば、JJとCCがそれぞれ初対面の会話では「何を聞けばいいのか」が、おのずと明らかになるのではないだろうか。

S3によって選択された話題については、JJのほうは「サークル」「出身地」「共通の知人」「共通の経験」「バイト」などの話題が取り上げられた。それに対して、CCでは、最も多く取り上げられた話題は「出身校」であり、他に「居住地」「就職・進学」「寮」「気候・環境」などの話題項目があった。JJとCCが共通して取り上げた話題項目として「就職」「学部･学科」が挙げられるが、CCのほうは個人情報をより多く開示し、より私的な話題が展開されていた。

５．２　話題の内容から見る話題選択ストラテジー

次に話題内容に注目してみる。話題の内容から見る話題選択ストラテジーとして、JJとCCとも「共通点を探索し強調する（S4)」、「相違点に関心を示す（S5)」、「危険な話題を回避する（S6)」の三つのストラテジーが挙げられるが、両者の使用方法には相違点が見られた。

三牧[7]は、S4は共通基盤を主張し、相手への関心を強調するポジティブ・ポライトネスであると論述している。また、相手に質問をする場合、ヘッジを用いるなどネガティブ・ポライトネスと一緒に使用することもあるため、S4及びS5はポジティブ・ポライトネスを主として、場合によってネガティブ・ポライトネスも付加されると指摘している（p. 57)。

例３　A:　××学科だったら、Ｑって知ってます？
B:　あ、Ｑちゃん？
A:　はいはい。
B:　あ、繋がってるんですね。
A:　サークルが同じで。
B:　なるほど。

この例のように、S4を用いて共通の知人がすぐ確認され、会話が盛り上がっている。S4については、JJは「共通の知人」「共通の経験」「出身地」「サークル・部活」などの話題から、相手との共通点やつながりを見つけ、強調することによって、相手との心理的距離感を縮める傾向が見られた。一方、CCには「共通の知人」「共通の経験」の２例しか見られなかった。これらから、JJはCCより共通点を強調して会話を進める傾向が強いということが窺える。

「相違点に関心を示す」という話題選択ストラテジー、S5の使用について、JJとCCは「出身校」「学部・学科」「就職」「授業」を共通して取り上げている。また、相手との相違点に関心を示す際には、CCが「居住地」「気候・環境」「恋愛・恋人」といった話題を選択するのに対して、JJは「サークル・部活」「旅行」といった話題を選択する傾向が見られる。

S6は「危険な話題を回避する」という話題選択ストラテジーである。フォローアップ・アンケートにおいて、「初対面会話における避けるべきトピックは何ですか。」という質問に対し、JJは「恋愛」「家族」などの、CCは「収入」「価値観」「女性の年齢」などのプライベートな問題は避けるべきだと答えていた。なお、実際の会話の中では、「恋愛」という話題はCCのグループで一例見られたが、JJの会話では扱われなかった。

６．結果と分析

６．１　話題選択スキーマの日中比較

JJが選択する話題カテゴリーと話題項目は、「大学生活」に集中しており、CCの話題選択はJJよりさまざまな話題がバランスよく取り上げられている。JJは「サークル・部活」「バイト」「共通の知人」「共通の経験」について、相手への関心を示しつつ、同じ集団、あるいは共通の基盤を強調するポライトネスを重視している。一方、CCは共通点を見つけるより、個人の主張を重視するため、話題選択の個人差は比較的大きい。

６．２　ポライトネスの私的領域における日中の認識差

中国では、初対面といった接触場面においても、相手の恋愛経験や家族の情報など立ち入ったことも遠慮せず聞いてくる人がいる。よく話し相手に「彼女・彼氏はいるんですか。」「兄弟は何人いますか。」などの質問をし、プライベート領域の事柄についてごく自然に聞き合う場合がある。

本研究の会話データにおいて、CCでは、「彼女がいるんですか。」と直接相手に質問したのに対して、JJは「恋愛・恋人」という話題項目が全く見られなかった。プライベート領域に踏み込み、聞き合うのは中国人にとってあいさつに近い感覚で、失礼な質問だとは思われないが、日本人には戸惑う質問となる。これは、私的領域についての認識が異なっているからではないだろうか。日本語母語話者は、特に先輩や初対面の相手の私的

領域に深く踏み込むことが中国語母語話者より少ないようである。ポライトネスの観点から見ると、初対面会話において、日本人は、他者と「距離を置きたい欲求、侵入されたくない」という「ネガティブ・フェイス」を重視し、相手の私的領域に踏み込みすぎないように話題を選択する傾向が見られた。それに対して中国人は、個人情報をより多く開示することで、相手に親近感を与えると言える。

6．3　高コンテキスト文化内での相違

Hall[17] は、文化を高コンテキスト（High context）と低コンテキスト（Low context）の二種類に分類している。日本と中国とも高コンテキスト文化のグループに属し、そして日本は最も高コンテキストに位置する。Hall は、コンテキスト度の高いコミュニケーションまたはメッセージは、情報のほとんどが身体的コンテキストの中にあるか、または個人に内在されており、メッセージがコード化された明確に伝達された部分には、情報量が非常に少ないとしている（p. 91）。また、林[18] は、低コンテキスト文化ではコミュニケーションの「内容」が重視されているのに対して、高コンテキスト文化では「タテマエ」「和」「形」が重んじられていると論じている。このように、日本語母語場面の初対面会話においては、「形式」を重視するのに対して、中国語母語場面においては、高コンテキスト文化圏ではあるものの、より「内容」を重視するため、上記の日中の話題選択ストラテジーにおける相違点が見られるのではないかと考える。

7．おわりに

本稿では、日本語母語話者同士と中国語母語話者同士による初対面会話を、話題選択の視点から分析し、両者の話題選択におけるスキーマとストラテジーの共通点と相違点について考察した。その結果、日本語母語話者同士と中国語母語話者同士の初対面話題選択スキーマは類似しているが、前者の方は相手のネガティブ・フェイスをより重視し、距離を置きながら会話を進めるのに対し、後者の方は相手のポジティブ・フェイスをより重視し、プライベート領域に踏み込むことによって距離を縮めようとすることが示唆された。本研究の結果を活用することで、より円滑な日中コミュニケーションが期待される。初対面の接触場面では、「大学生活」「共通点」「所属」「出身」などの無難な話題カテゴリーから話題選択を行うことが勧められる。また、誤解を回避するためには、日本語母語話者は、相手のポジティブ・フェイスへの欲求を理解し、相手に親近感を示し、少し多めの自己開示をするなどのストラテジーを取り、中国語母語話者は、日本人母語話者のネガティブ・フェイスにも考慮し、相手の私的領域に入り過ぎないように心掛けるといったストラテジーが推奨されるであろう。

本研究では、母語話者同士の初対面会話のみに注目したため、日中の接触場面における初対面会話の話題選択スキーマとストラテジーについては分析、考察ができなかった。そして、日中の限定された数の大学生に限って検討したため、男女や年齢層による話題選択傾向の共通点や差異などがどれほどあるのかについての分析も明らかにできなかった。

今後、異文化間コミュニケーションを視野に入れ、日本語母語話者と中国語母語話者の接触場面の初対面会話データを収集し本研究結果と比較検討すると同時に、より円滑な日中コミュニケーションのために、話題選択やストラテジーに関して提案ができるよう、更なる研究を進めていきたい。

参考文献

1）Berg, J.H. & Clark, M.S. ‘Differences in social exchange between intimate and other relationships: gradually evolving or quickly apparent?’ In V.J. Derlega & B.A. Winstead (Eds.) *Friendship and Social Interaction*. 1986.

2）Svenneving, J. *Getting Acquainted in Conversation: A study of initial interactions*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 1999.

3）西田　司『不確実性の論理―対人コミュニケーション学の新視点』創元社．2004.

4）Brown, G. & Yule, G. *Discourse Analysis*. Cambridge University Press. 1983.

5）Coulthard, M. *An Introduction to Discourse Analysis (Applied Linguistics and Language Study*) Longman. 1985.

6）メイナード、泉子・K『会話分析』くろしお出版．1993.

7）三牧陽子「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー－大学生会話の分析－」『日本語教育』1999．103，p49－58.

8）全　鐘美「初対面場面における話題回避に関する質問紙調査－日本と韓国の大学（院）を対象に－『言葉と文化』名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻．2009．p95－111.

9）西田　司『異文化の人間関係』多賀出版．1998.

10）熊谷智子・石井恵理子「会話における話題の選択－若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から－」『社会言語科学』2005．Vol 8，p93－105.

11）奥山洋子「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較：日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に」『社会言語科学』2005．8 (1)，p69－81.

12）張　瑜珊「台日女子大生による初対面会話の対照分析：初対面会話フレームの提案を目指して」『人間文化論叢』2006．9，p223－233

13）趙　凌梅「話題選択スキーマとストラテジーの日中

対照研究：初対面会話データを用いて」「国際文化研究」2014．20，p145－157．
14) 宇佐美まゆみ「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想」国立国語研究所編『談話のポライトネス』国立国語研究所．2001．
15) Brown, P. & Levinson, S.C. *Politeness: Some Universals in Language Usage (Studies in Interactional Sociolinguistics)*. 1987.
16) McLaughlin, M. & Cody, M. Awkward silences: Behavioral antecedent and consequences of conversational lapse. *Human Communication Research*. 1982. 8(4), p299-316.
17) Hall, E. T. *Beyond Culture*. New York: Doubleday. 1976.
18) 林　吉郎『異文化インターフェイス経営：国際化と日本的経営』日本経済新聞社．1994.

資料

西南交通大学 Southwest Jiaotong University

Informed Consent Form

UNIVERSITY OF YAMANASHI

I, the undersigned, confirm that (please tick box as appropriate):

1.	I have read and understood the information about the project, as provided in the Information Sheet dated _____.	☐
2.	I have been given the opportunity to ask questions about the project and my participation.	☐
3.	I voluntarily agree to participate in the project.	☐
4.	I understand I can withdraw at any time without giving reasons and that I will not be penalised for withdrawing nor will I be questioned on why I have withdrawn.	☐
5.	The procedures regarding confidentiality have been clearly explained (e.g. use of names, pseudonyms, anonymisation of data, etc.) to me.	☐
6.	If applicable, separate terms of consent for interviews, audio, video or other forms of data collection have been explained and provided to me.	☐
7.	The use of the data in research, publications, sharing and archiving has been explained to me.	☐
8.	I understand that other researchers will have access to this data only if they agree to preserve the confidentiality of the data and if they agree to the terms I have specified in this form.	☐
9.	Select only **one** of the following: • I would like my name used and understand what I have said or written as part of this study will be used in reports, publications and other research outputs so that anything I have contributed to this project can be recognised.	☐
	• I do not want my name used in this project.	☐
10.	I, along with the Researcher, agree to sign and date this informed consent form.	☐

Participant:

_____ _____ _____
Name of Participant Signature Date

Researcher:

_____ _____ _____
Name of Researcher Signature Date